

# 新山協ニュース

▲ 発行者 鈴木敏雄 ▲ 発行所 新潟県山岳協会  
〒940 長岡市学校町1-12-23 室賀輝男方 TEL 0258-32-0428

年頭に当り

新潟県山岳協会会長

室賀輝男

新年お目出度う御座居ます  
新しい年を迎えそれぞれ今年こそと、希望に胸をふくらませ、仕事や家庭、山行にと計画を練って居られることと思ひます。昨年は戊辰の年と云われるにふさわしい、激動の年でありました。世界は東西の緊張緩和を基軸に大きく変動を開始した年でありました。国内では円高に始まり、円高で終わった経済問題を筆頭の年でも創立10年、20年、30年など祝賀会、出版記念会などの飛躍へ向けての節目の催し。国内では円高に始まり、の多い年でありました。山岳会の現況が、全国的に若者の

## 謹賀新年

今年もよろしくお願い申し上げます

昭和64年元旦

### 新潟県山岳協会

会長 室賀輝男  
副会長 望月林村  
理事 小上鈴木  
副理事 長平田  
事務 兼幹敏大

組織離れ、高令化傾向の進む中で、県山岳協会は年々僅かでありましたが加盟団体も増加し、確固たる基盤を構築しながら、創立40年の節目を迎え得たことは、誠に感謝に堪えません。ことに昨年は協会の諸行事が、例年になく活発であり、盛り上りを見ました。特に団体登山では、北信越国体の開催県として、準備から開催へ組織を上げての協力で、立派に遂行出来ました。念願のフルエントリの偉業が達成出来、京都国体では越後岳人の実力を発揮久々にさわやかな団体気分になれましたのも選手、役員の皆さんの御苦労の賜と、深く敬意を表します。山岳協会40周年の目玉として進めてきました、大興安嶺踏査登山は、困難な国際事情を踏み越え、関係機関のご尽力を載き、平田隊長を中心に先遣隊の現地調査が9月に実施され、本年はいよいよ念願の本隊派遣の道が開かれました。県下山岳会からの多数の参加とご協力で、立派に成功をおさめたいと念じて居ります。

先般諸岳兄、県下山岳会の皆さんによって支えられる県山岳協会は、人生の壮年期にあり、社会からの期待は大きいものがあります。山岳協会が従来のご親睦、技術研修、団体登山などの主活動から、一歩前進して更に、自然保護、遭難対策、地域での社会体育活動への参加、国際交流などの課題を責任山岳会として期待されております。各位からの一層の御理解により、先ず

### 新年会案内

日時 1989年1月22日

(日) 午前11時より

会場 イタリア軒

新潟市西堀通り7

☎0258-

224-5111

会費 10000円

申込 上、下越、新潟、各

連絡事務所、又は協会事務局へ。

長岡市学校町1の12

の23 室賀輝男方

☎0258-

3210428

各地域での底辺の拡大、組織強化をすすめられ、広く県民に安全に自然を親しみ、たのしめるような、豊かな心と健康づくりのために、活動の輪

山と書物③

「山頂へのみち」  
——わが未踏峰探訪の旅——

筑木力著

著者は本県登山界の大先輩である。高校の山岳部顧問を担当するかたわら、新潟県山岳協会副会長、新潟県体育協会理事、新潟県高体連登山部常任委員などを歴任された。山歴は30年以上に及び、その間になされた山岳紀行や山についての随筆、談話、研究などをまとめたものが本書である。これは同じ著者の前著「わが出逢いの山々」の続編とも言えるものである。

さてこの両著を読んでまず感ずるのは著者の長い山行の中には大きなピークが二つあったということである。一つは国体や高校登山大会などを中心に、高校の山岳部を指導していた時期であり、もう一つは最近数年間の、今まで著者が登り残してきた山々を精力的に登っている時期である。第一のピークにおいては、著者は登山家であるよりも教育者であった。この時期に書かれたものには並々ならぬ力がこもっていて、それはそのときの著者の感動が、そして思い入れが極めて強かったことを示している。高校生とともに歩んだ道程は、著者に終生忘れ得ない感動を残したようであり、その文章からは青春の炎を燃やす若者に対する、あたたかいまなざしが感じられる。

得られたようである。つまりそれは一つのバランス感覚といえる。著者はいう。「登山は本質的に冒険的要素を含む行為である。…安全登山という言葉自体は矛盾した表現である。凡ゆる登山技術を修得した人間でも、最後の判断はやってみなければわからない、というリスクの要素が含まれてくるからである。このように登山は冒険性を伴うが、だからといって初めから死を予想するような冒険登山は邪道であると言わなければならない。ほんとうの安全登山とは、山の訓練を十分積んで遭難しないように行動する登山のことである。冒険とか未知への探究というような姿勢がなければ人間の進歩は期待できないが、自分の能力に合った合理的な冒険でない遭難をひき起こすことになる。」

現在著者の著者自身の未踏峰探訪の旅は極めて充実したものであり、日本全国各地の山々に及んでいる。そしてこの第二期における著者の山行は著者自身のことばによれば「山頂へのみち」ということになる。ところで山を登り抜いてきた著者の現在の、そしてこれからの山行が「山頂」へのみちであってみれば、その「山頂」とは果していかなるところなのか、またいかなるころであったのか。著者はどのように語られるのだろうか。次著の構想もあると聞いている。こんな肩ひじの張った問いなど著者は軽くないされるのかも知れないが、とに角智見をご教示いただければと願うもの一人である。

冬山登山の警告

山岳遭難対策中央協議会

冬山登山における遭難事故が依然としてあとをたたず、例年、年末年始には、多くの遭難事故が発生しています。日本の冬山は、悪天候の連続、気象の急変、大雪、など優れた技術、指導力を持つリーダーのもとで、別記の注意事項を参照の上、慎重かつ適正な計画と万全の準備を整えて登りましょう。

山は慎みましよう。

### 冬山登山は気象

#### 状況の把握から

○この冬は、西高東低の気圧配置が続き、平年より寒い日が多い見込みです。特に日本海側の地方では大雪の恐れがあります。

○1月は、季節風が強く、西日本を中心に寒さの厳しい日が多く、日本海側の地方では大雪の恐れがあります。大雪の直後には表層雪崩が発生し易いので注意が必要です。

○2月は、本州の南岸を通る低気圧の影響で、太平洋側の地方でも雪の降る日があります。また、寒い日が多い見込みです。

#### 行動計画に無理は

#### ありませんか？

34名の方が山で命を失いました。冬の記録ではありません。63年7月、8月のわずかに2カ月の夏山での出来事です。今季の冬山は積雪量も多く、天候は荒気味です。計画や装備にゆとりはあり

ますか？ もう一度、全てをチェックして下さい。山に入ってからでは遅すぎます。

#### 登山計画書はあなた の生命を左右する ザイルです。

昭和63年の冬山では、遭難した43パーティのうち30パーティ(69・8名)が登山計画書を提出しておりませんでした。

#### ◆登山計画書の提出先

○登山地域の県警察本部外勤課、及び地元の警察署、交番、派出所。

○山域の登山指導センターや案内所、入山口の専門ポスト等。  
○職場、学校、家庭等。

### 2月3月に登れる山

#### 小野子山(1208m)

長岡ハイキングクラブ

田中栄弘

子持山(38号で紹介)を午前から登山道がある。入口に峠を挟んで反対側にある小野子山に登ろう。子持牧場の上

### 登山計画書の提出

- 万一の遭難事故が早くわかり、救助活動がスムーズに行われます。
- むだな捜索救助活動を省くことができます。
- 自分や家族が負担しなければならぬ捜索救助費用が少なくて済みます。
- 家族や関係者を安心させることができます。

これまでも登山計画書を提出したおかげで、命拾いしたという事例が数多くあります。登山計画書を提出することは、あなたの生命を左右するザイルであると考えて必ず実行しよう。

は全山つつじで綺麗に彩られる、と地元の人には自慢げに説明してくれる。

平坦な道を進み、直径20cmの松林が出てくると少しづつ登りがきつくなってくる。40分も歩くと尾根道に出る。中之条側からの冷たくて強い風が、身体をゆすつてくる。左右の尾根筋は、背丈3mもあるつつじの群生地になってくる。雪が少ないので真直ぐ伸びている。最後の胸突き八丁を登ると頂上？と思いきや200m先の方がわずかに

高い。1時間で登れたので足取りも軽くなる。ところがそこまで上がると、頂上はまだ先。尾根が伸びている。右側中ノ岳側は伐栽され綺麗に植林されている。下まで道が入り、直接登ってもこれがあるが、植林地の下草が多い時期は無理だろう。もう15分頑張つて山頂に着く。ここは雑木が伸びて展望が思わしくない。けれど子持山に匹敵する展望が楽しめるコースである。下山50分。高速を使つて3時間以内で新潟まで帰れる。

### 昭和63年度

#### 山岳スキー講習会案内

文部省登山研修所

07641

8211211(代)

趣旨 登山の指導的立場にある者の参加を求め、主として山岳スキーに関する講習を行い、資質の向上を図る。

期日 昭和64年2月11日(土) 応募資格及び募集人員

から2月14日(火)までの

4日間

会場 文部省登山研修所

〒930114 富山県中

新川郡立山町千寿ヶ原

参加者は年齢50歳未満で左記の資格に該当する者ア、各山岳会(クラブ)会長の推薦する者

講習内容		講師
講義	積雪と雪崩について	川田 邦夫 日本雪氷学会員
実技	山岳スキー技術 生活時対策	主任 渡辺 正蔵 盛岡 山窓 会
研究協	冬山の食糧・装備について 実技について	ほか7名

講習内容と講師

(2)募集人員  
30名

イ、大学山岳部のリーダー及びリーダー候補者の女子学生  
ウ、高等学校及び高等専門学校において登山を指導している者  
エ、都道府県・市町村教育委員会事務局における登山担当者および地域・職域において登山を指導している者

参加申込み

参加申込みに当たっては、左記事項に留意し、申込様式により申し込むこと。  
(1)申込みについて

ア、一般山岳団体関係者については、各山岳会(クラブ)が参加者を決定し申込むこと。

イ、公立高等学校関係者については、各都道府県教育委員会が当該都道府県の高等学校体育連盟登山部と協議の上、参加者を決定し申込むこと。

ウ、都道府県・市町村教育委員会事務局における参加者および地域・職域からの参加者については、当該教育委員会が参加者を決定し申込むこと。

(2)申込締切

昭和64年1月14日(土)までに協会事務局へ連絡。必要書類を送付します。

受講者の決定

登山研修所で選考の上、受講者を決定する。

# 報告・案内

## 県体育協会 賛助会員報告

五十嵐篤雄(下越山岳会)  
室賀 輝男  
(長岡ハイキングクラブ)  
小林兼一郎  
(新潟大学山の会)

以上3名の方から御賛同を頂きました。

## 理事会報告

12月4日、長岡市東泉閣で開催。

◎指導員の認定について  
◎国体副委員長の承認について

帯刀 勤(下越山岳会)

## ニュース

### 購読者募集

12回分、1500円で本人宛送付します。各団体、希望

## 高体連役員紹介

部長

鈴木 竹登(新井高校長)

委員長

半谷 高紀(新井)

副委員長

浜田 亮一(三条東)

高木 勲(江南)

競技力向上委員

倉石 義範(新発田南)

## 北信越5県 会議案内

2月4日/5日に長野県山岳協会主管で、茅野市蓼科高原で開催。

◎京都国体報告について  
◎北信越石川国体について

昭和63年度の場合	年間掛金	79200円
死亡した場合	150万円	
捜索救助費用	100万円	
詳細は書類参照		
当協会加入者	280名	
組織会員数	2766名	

会場 白山山麓

尾口村 縦走競技

吉野谷村 踏査競技

鳥越村 登攀競技

申込 協会事務局まで



# 冬山への警告

## 遭難対策委員会

11月21日、新潟気象台発表の長期予報により、12月中旬から2月までは強い冬型気圧配置が続き、今冬は大雪の恐れあり、ということでした。各山岳会では既に冬山登山の準備等、計画を進めていることと思いますが、今冬は厳しい冬山が予想されますので、気象には充分注意され事故のない有意義な冬山合宿であることを祈ります。

冬山は厳しい自然現象からくる予想外の危険が待ち受けている場合が多く、絶対安全だという基準はありません。軽卒な冒険や無謀な試み、自己過信等は慎まねばなりません。冬山で事故を起こすと捜索、救助等で多くの人達に改めて大変な危険と迷惑のかかることは必至です。

遭難を起こさないための綿密な計画も含めた登山計画の立案を切にお願いします。

### 入山前に知って置きたい

#### (1) 登山コースの事前研究

目的とする山及び登山コースの状況、危険箇所、回収可能なデポ地の選定等を事前に研究する。最近は山岳雑誌等の情報だけを利用して、安易に入山するパーティが多い。安全を期するためコースの偵察等おこない、その上、地元等各種の山岳情報を参考にすることが必要である。

#### (2) 万全な食糧、装備の準備

科学、技術の進歩が登山にも導入され、食

糧、装備等は著しい進歩をとげており、これを反映して最近では食糧の軽減を図ることのみ考えるため、非常時の食糧が不足する傾向がある。吹雪、ドカ雪に耐え、これを克服するためには質量ともに十分なものを準備する必要がある。また装備も小型軽量、高機能化されているが、新しい装備については、その正しい使用法を熟知し十分使いこなせるよう訓練してから入山する。

#### (3) 良好な体調の保持とリーダーの責任

十分な予備日数で入山し、細かい地形、雪面、積雪等を見極め、より安全なルートを選ぶ。またリーダーはパーティ全員の生命を預る重い責任を有しており、遭難事故の要因は体の不調によるものが多いため、リーダーは常にパーティ全員の体調を十分に把握するとともに、危険が予想される場合は思い切って退却する等、慎重な判断で行動する。

#### (4) 遭難の原因

遭難の原因は結果論であって、今までの経験上想像もつかない原因で、これから起こることもあるが、冬山で統計的には表層雪崩が最も多い。斜面が雪を支えられる限度を越すと必ず雪崩が発生する。一般に気温上昇が主な発生原因といわれているが、降雪中は気温の上昇、時間に関係なく発生するものである。

次に多いのが疲労凍死、滑落である。天候不安定な11月、12月、1月に事故が集中している。遭難は悪天候が大きな影響を与えているが、好天のとき起きた遭難事故も悪天候の

前日か翌日に多い。

机上知識、気力や若さだけで冬山はこなせません。先輩、経験者、その山の地元古老達の意見を十分聞き入れ、討議、ミーティングを重ねる顕虚さと、リーダーの豊かな経験の中から生まれる判断力が冬山成功の要因です。

## 遭難事後対策

遭難事故は人命に関係なく絶対にさげなければなりません。不幸にして事故が発生した場合はどうするか。冬山登山者にとって好ましいことではありませんが、絶対的保証がない以上、万一に備える心構えが必要だと思えます。

人間が死という極限の事態に直面したとき、パーティは一時的ですがノーマルではありません。そうした心理状態の中で客観的なペースを維持するには、事態収拾者は、非情の人にならないと正しい処理はできません。

## 遭難発生時の措置

遭難にはいろいろのケースがあるので措置についても、その現状によって臨機応変でなければならぬが、リーダーは基本的な次の行動をとらなければなりません。

- (1) パーティを安全地帯に導き、事故の再発を防ぎ、メンバーの心理的動揺を静める。
- (2) 記録係を指名する。事故が起きた時点からどんな細かいことでも綿密に記録する。
- (3) 捜索の可否を判断して、不可能の場合は生存とみて捜索計画をたて、統制ある捜索を開始する。
- (4) 遭難者を発見したら、二重遭難を避けるた

め、地形状況を観察し安全な側から近づく。

- (5) 状況を把握したら、無線機がある場合は、地元警察署、遭対関係に救援依頼をする。無線機がない場合は最低2人以上の伝令を出す。その場合、口頭でなく必ずメモでおこなう。
  - 遭難者の氏名、年令、住所、勤務先、遭難日時、場所、負傷の程度（死亡状況）、救助の現況と見通し、パーティの氏名、人数、所属、責任者氏名、電話番号。
- (6) 救援隊又はヘリコプターがくるまで、遭難者の生死の確認をし、はっきりしないときは生存と考える。生存の場合は、状況観察、意識があるか、裂傷、骨折、内出血の有無、ショックによる悪感、虚脱状態などを観察し、できるだけの応急手当をおこなう。遭難者、救助者の防寒具、食糧等を確保しておく。

救援依頼により地元では遭難対策本部を設け、遭難者家族、所属団体、山岳遭難救助隊に連絡すると共に、救助隊の出動体制を確立し、総べての行動は、遭難対策本部の指揮下に入る。

入山10日前に所轄の警察署に登山計画書、登山届等提出してあれば、救援、救助活動が無駄なく迅速におこなわれ、助かる確率もある訳です。

登山届はバイク乗りのヘルメットのようなもので、事故が起きなければ全く不要ですが、不幸にして起きた場合のことを考えると、欠かす訳にはゆきません。登山届は登山者の義務です。自分の身を守るためにも必ず登山届を提出したいものです。